

---

# アルビオンの平和主義者

ライト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アルビオンの平和主義者

### 【Zコード】

Z3858Z

### 【作者名】

ライト

### 【あらすじ】

一人の平和主義者? な男がハルキニアに転生した時、歴史は変わる。

これは男が少しでも自分の望む世界と大事な人達を守りつつする物語。

……しかし、この物語は自分の意志に反する流れに男が流れまる物語でもあります。

## プロローグ（前書き）

皆さん初めましてライトです。

この小説は、ゼロの使い魔の一次創作の小説を読んで自分も書きたくなったので、下手くそですけど書いてみました。

ゼロの使い魔は好きなキャラクターが多いので、できるだけ原作では死んじゅうキャラに生き残つてもらう予定でして、そのせいでキャラの性格や物語の設定が変わる可能性もありますが、そういうのが構わない人はぜひ読んでみてください。

## プロローグ

ブリミル歴6000年。

この時代は様々な争乱が起こり、数々の英雄が綺羅星の如く誕生し、ハルキゲニアの転換期を迎えた時代だつた。

後々、この時代の人間は物語として数多くの講談に上るのだが、最も有名なのは？と聞かれれば、人々は迷わずアルビオンの英雄『平和王 エドワード・テューダー』と答えるだろう。

彼がいなければハルキゲニアの改革は無かつたと言われ、彼が努力を怠れば死すべき運命にあつた者は巨万といただろうと予想されている。

また英雄達ともつとも広く交流していたのも彼であり、驚異的なことに英雄達の中には彼と立場上、敵対した者はいても、彼を侮辱する者は一人もいなかつた。

味方も敵も彼を尊敬し感謝していたからだ。

そんな彼を人々はこのように評している。

彼の異母兄であるトリスティン国王ウェールズはこう言った。

「エドワードはまさに英雄にして『平和王』の称号に相応しい男だ。エドワードがいたからこそ現在のハルキゲニアがあり、私も生きていられるのだから。兄として自慢の弟だが、兄の立場としては比べられないようもつと王として力を付けねばならないといけないな」

彼の友人であつた『青銅のギーシュ』はこう喋つてゐる。

「彼はとても強い人間だつたね。同じ士メイジとしても男としても尊敬できたから僕も負けないよう努められたものだよ。あ、あと女性にも凄くモテていたね。タイプはバラバラだけど彼の妻達は全員美人で、男としては羨ましかつたから僕も彼に負けないようになつたも、モンモランシー？ その手にあるのは何かな？ えつ。……む、昔の話だからここは大目に見て…ドゴッ！（鈍器のような物で殴られた音）」

彼の側近であり妻の一人でもあつたマチルダはこう話してゐる。

「エドは馬鹿みたいに優しい奴だね。王様になつても身分や種族にこだわらず平民や貴族だけじゃなくて亞人に對しても優しかつたし、戦闘でも出来るだけ殺すことは避けるようにして敵の死体でも丁寧に埋葬をするようにしてゐたよ。他にも『10の内10の人間を助けるのは難しいことだ。時にはその内の1・2を見捨てる覚悟を持たないといけない』って言つときながら、さつき前まで敵だつた人間でも、可能性が少しでもあつたら自分が傷付いても助けようとする奴だからね。本当にあいつは馬鹿だよ。……まあ、そういうところが惚れた理由でもあるんだけどねえ……」

以前は彼の敵であつたエルフのビターシャルこう語つてゐた。

「……あの者は不思議な男だつた。一見してごく普通の男であつたのに、あの者はエルフに負けぬ実力を見せたばかりでなく、我々ですら封じ込めなかつたシャイターン（悪魔）の門と数千年に渡つて続いた人間との隔たりを無くしてしまつたのだからな。……ただ、一族の者としては感謝しているが、あの者が私を人間との外交官代表

に指名したばかりに、人間との交渉で面倒な厄介事が全部私に來たのだけは許し難いが……」

様々な人に認められたエドワード・テューダー。

彼はどういった人物であつたのか。彼がハルキゲニアに何を成したのか。そして彼が一体どんな平和を世に残したのか。

これはある一人の平和主義者を語る物語……

## プロローグ（後書き）

いかがだつたでしょうか？

まだプロローグですからあまり感想がないかも知れませんが、少し  
でもあつたら感想をお願いします。

また、文章の未熟さや更新の遅さが考えられますが、その辺の方も、  
ご鞭撻をあまり痛くしない程度にお願いします。

## 第一話 僕が赤ん坊！？（前書き）

遅くなつてすいませんライトです  
ようやく次が出来たので投稿します。  
短めですがよろしければ楽しんでください

## 第一話 僕が赤ん坊！？

『魔法を使いたい』

そんなことを考えた人間はいくらでもいるだろう。僕もそんなことを考えた一人だから。

只、僕の場合はその要求が他人より大分強かつたと思う。

幼い頃に両親を亡くした僕は孤児院に引き取られ、そこでの唯一の娯楽が本だつたため、院にいる間は貪るように本を読んでいた。

それらを読んでいる内に、特に気に入つたジャンルがファンタジーだった。

天空に浮かぶ巨大な城。世界に存在する神々や精霊。ドラゴンやグリフォン等のカッコイイ怪物。エルフや小人といった人間以外の住人。そして、不思議な世界を不思議な力『魔法』を使って生きていく魔法使い。

次第に僕はファンタジー小説やマンガだけでなく、テレビや映画見て、神話や宗教関連を読み、科学的に可能かどうかを調べ、果ては怪しげな黒魔術の書等も手に入れて魔法が使えるか試してみた。

でも、結果はいつも同じだった。『不可能』という三文字の結果が17年間、常に続いた。

中学の頃には人前で魔法を使おうとしていることは隠していたし、高校時代でほとんど諦めてもいたが、それでも『魔法を使いたい』という夢を捨てはしなかった。

だからだったのかもしれない。

今、僕がここにいるのは

僕こと桑原大地が田を覚ますと、そこは知らない天井だった。

(ん？ どうだらう？ は……)

身体を動かそうとするが何故か上手く動けない。  
それどころか頭も妙にぼやけている。

( 一 体 、 僕 に 何 が …… )

鈍い頭をどうにか動かして、何があつたかを思い出させる。

(……そうだ。駅から学校に向かおうとしていたんだ。それで駅のホームで電車を待っていた時に、近くにいた子供が線路に落ちて、その後すぐ電車の警笛が鳴って、思わず僕は飛び降りて……)

その瞬間、僕は気付いてしまった。

（僕は……あの時に……死んだ……？）

飛び降りてから、僕は何とか子供を持ち上げるとホームに居た人に渡して、その後すぐに自分もホームへ上がろうとしたんだ。けど、僕は子供を助けるのに時間が掛かりすぎて電車がもう近くまで迫っていた。

テーマンみたいに電車を素手で止めるような力は当然無いのから、ここまで思い出したら結果は見えている。

しかし、それだと辻褄が合わない。

惹かれた瞬間は覚えていないけど（覚えていたくもないけど）、車ならともかく電車に正面から轢かれて生きているはずはない。でも、僕はこうして生きている。

この矛盾した状況に一人で悩んでいると誰かの声がした。

「……ローラ。本当にいいのか？ 確かにお前の気持ちは分かるけど、それでもエドワードにはやはり……」

「やめてよアル兄さん、赤ちゃん前でそんなこと言つなんて。それにこの話はもう済んだはずよ、エドは私が育てる。あの人に頼らない。この家が駄目ならエドと一人で生きていくって

「ローラ、けれど……」「

(「この人達は何を話しているのだらう? ととりあえず声をかけてみるか……)

そう思つて僕は一人に「すこません、じょつといこですか」と声をかけたはずなのに、でてきた言葉は、

「あうあう、あううう」

まるで赤ん坊のような声が僕の口からこぼれていた。

(は、はいっ! ? 何なの今の一? ?)

僕がビックリしていると、一人は先程の声に反応してこっちを向いてきた。

「あら目が覚めたのねエドワード。よしよしいい子ですね~、オムツですか~? それともミルクかな~?」

アル兄さん、悪いけどメイドに頼んで一つも持つてきてもらつて「

「お前、兄を小間使い代わりにするつて……いや何でもありません。だからそんな目で見ないでくれよローラ、すぐに行きますつて……まったく母は強しと言つけど、元からあんなに強いのにこれ以上強くなる気なのか……ブツブツ……」

アル兄さんと呼ばれた男性が文句を言いながら部屋を出ていくと、ローラとこう女性は僕の方に近づき、困惑している僕に構わずその

まま手を伸ばすと、僕の身体をひょいと抱き上げた。

（う、嘘つ。いくら僕が小柄だからって、さすがに女性に軽々と持ち上げられるはずは…ってか、この人でかすぎるでしょう…？）

抱き上げられて気付いたのだが、僕を抱き上げたローラさんは僕の倍以上に大きかった。

顔が近づくとかなりの美人であることも分かつたが、さすがに自分の倍以上あると少し恐くなってしまった。

思わず顔を机に這らす

横を向いた先には鏡が立てかけられており、そこに映っていたのは僕を抱き上げたローラさんと小さな赤ん坊だけだった。

・・・赤ん坊？

赤ん坊を抱いているローラさん 抱かれているのは自分  
つている赤ん坊＝自分 鏡に写

僕、赤ん坊になつてんの！？ なんで！？

## 第一話 僕が赤ん坊！？（後書き）

どうでしようつか？  
感想があればぜひください  
よろしくお願ひします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3858n/>

---

アルビオンの平和主義者

2010年12月8日00時49分発行